

# 第一章 光る源氏の物語 紫の上追悼の春の物語

[第一段 紫の上のいない春を迎える]

春の光を見たまふにつけても(年が改まって、新春を迎えなさっても)、いとどくれ惑ひたるやうにのみ(春の女だった紫の上が居ない事ばかりが思われて、いっそう涙に暮れて落胆したようにばかり)、御心ひとつは(殿の御内心では)、悲しさの\*改まるべくもあらぬに(悲しさが変わるものでもないのに)、外には(とには、門前には)、\*例のやうに人びと参りたまひなどすれど(例年のように年始挨拶の高官たちが参りなさったりするが)、御心地悩ましきさまにもてなしたまひて(気分が優れないということにして)、御簾の内にのみおはします(面会に応じず、殿は御簾内に籠もっていらっしゃいます)。 \*「改む」は<年が改まる>に掛けた言い方なのだろう。 \*「例のやうに」は注に<『集成』は「妻の服喪は三ヶ月で、旧年中に源氏の喪は明けている」と注す。>とある。

兵部卿宮渡りたまへるにぞ(御弟宮の兵部卿宮が御見えになったというので)、ただうちとけたる方にて対面したまはむとて(こじんまりした部屋で二人だけでお会いなさるということで)、御消息聞こえたまふ(こんな御歌で、ご案内申しなさいます)。

「わが宿は花もてはやす人もなし、何にか春のたづね来つらむ」(和歌 41-01)

「花待つ人もいないのに、どうして春はやってくる」(意識 41-01)

\*注に<源氏の詠歌。「花もてはやす人」は紫の上をさす。「春」は蛭兵部卿宮を喩える。「の」は主格を表す格助詞。『奥入』は「何にきく色染めかへし匂ふらむ花もてはやす君も来なくに」(後撰集秋下、四〇〇、読人しらず)を指摘。>とある。

宮、うち涙ぐみたまひて(宮は涙ぐみなさって)、

「香をとめて来つるかひなく、おほかたの花のたよりと言ひやなすべき」(和歌 41-02)

「目当てがあって来たんです、ただの花見じゃありません」(意識 41-02)

\*訳文は<梅の香を求めて来たかいもなく、ありきたりの花見とおっしゃるのですか>とある。「かをとめて」は<香を求めて>と<彼を尋めて(目的があって=例によって気落ちしているあなたを慰めようと思って)>との複意らしい。下の「紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのいとなつかしき」との併せ技で味が出ている、というか、下文の枕のようにも見える歌。

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまの(と御返歌されて、紅梅の下をとお部屋に向かっておいでになるお姿の)、いとなつかしきにぞ(とても親しみのある物腰といたら)、これより他に見はやすべき人なくや(この人を置いてその見栄えを褒めそやすべき人などいない)、と見たまへる(とお見えになります)。

花はほのかに開けさしつつ(梅の花が少し開きかけて)、をかしきほどの匂ひなり(良い風情です)。御遊びもなく(でも物静かで、楽器演奏もなさらず)、例に変わりたること多かり(例年とは違う事が多かったのです)。

女房なども、年ごろ経にけるは(殿付きの女房なども長年仕えてきた者は)、墨染の色こまやかにて着つつ(濃い色の黒っぽい喪服を着て)、悲しさも改めがたく(年が改まっても上が亡くなった悲しさも変わらず)、思ひさますべき世なく恋ひきこゆるに(気持を冷ませることも出来ない春の風情の中で上を慕い申しては)、絶えて(殿が上亡き後一度も)、御方々にも渡りたまはず(他の御部屋様方にもお出向きなさらず)、紛れなく見たてまつるを\*慰めにて(いつも東の対の自室にいらっしゃるのを拝し申すのが心の拠り所だったが)、\*「慰めにて」は構文上は下の「なかなか」に掛かり、「なかなか」の反意からして、この「にて」は逆接意となる、ようだ。また、「慰む」は<安堵する、安心する>だろうが、その「安心」は上文の文脈では<上の供養になるから>だが、下文の挿入句では<自分が殿の相手になる可能性が増えるから>みたいにも読めて、とにかく分かり難い。ざっと<心の拠り所>とボカす。

馴れ仕うまつれる年ごろ(召人として側仕え申してきた長年)、まめやかに御心とどめてなどはあらざりしかど(妻の座に据えるお気持ちなど殿にはおありではなかったが)、時々は見放たぬやうに思したりつる人びとも(時々はお抱きになっていた女房たちも)、なかなか(殿が他所へお渡りなさらないとはいえ)、かかる寂しき御一人寝になりては(こうした傷心の御一人寝にあっては)、いとおほぞうにもてなしたまひて(全く素っ気無く対応なさって)、夜の御宿直などにも(夜伽のお相手なども)、これかれとあまたを(何人も大勢を)、御座のあたり引きさけつつ(お布団からは遠ざけて)、さぶらはせたまふ(侍らせなさいます)。

## [第二段 雪の朝帰りの思い出]

つれづれなるままに(そんな殿居で、殿は取り留めも無く)、いにしへの物語などしたまふ折々もあり(昔の思い出話をなさるときが何度かありました)。名残なき御聖心の(なごりなきおんひじりごろの、旺盛な性欲がすっかり無くなった殿の仏心が)深くなりゆくにつけても(深まるにつれて)、さしもあり果つまじかりけることにつけてつ(それほど深い仲になりそうもない浮気についても)、中ごろ(手紙の遣り取りなどに)、もの恨めしう思したるけしきの(紫の上が面白く無さそうな素振りを)、時々見えたまひしなどを思し出づるに(時々見せなさっていらした事などを思い出しなさい)、

「などで(どうして)、戯れにても(浮気にせよ)、またまめやかに心苦しきことにつけても(また本格的に邸内生活全般に及ぶ女関係にしても)、さやうなる心を見えたてまつりけむ(あれ程に旺盛な気持で上を煩わせ申してしまったのだろう)。なに事もらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば(何事も思慮深いお方だったので)、人の深き心もいとよう見知りたまひながら(相手の女の気持もよくお考えになって)、怨じ果てたまふことはなかりしかど(上は無闇にお怨みなさることはなかったが)、一わたりづつは(それぞれの相手毎に)、いかならむとすらむと思したりしを(どうなる事か、と案じなさいたことで)、すこしにても心を乱りたまひけむ(少しでも心を悩ませなさいた事だろう)」

ことの(という事が)、いとほしう悔しうおぼえたまふさま(相済まなく残念に思えなさる考え方で)、胸よりもあまる心地したまふ(殿は胸が詰まるほどの自責の念をお感じなさいます)。

その折のことの心を知り(その当時の事情を知っていて)、今も近う仕うまつる人びとは(今でも側近く仕えている女房たちは)、ほのぼの聞こえ出づるもあり(少しづつ当時の紫の上の様子を話し出す者も居ました)。

入道の宮の渡りはじめたまへりしほど(そうした女房たちの話から、女三の宮が六条院にお入りなさった当初は)、その折はしも(その当座は必ずしも)、色にはさらに出だしたまはざりしかど(紫の上は不満を顔色には少しも表しなさらなかったが)、ことにふれつつ(何かにつけて)、あぢきなわぎやと(情けない事だと)、思ひたまへりしけしきの\*あはれなりし中にも(思っていたしやっった様子が殿に感じられた中にも特に)、 \*あはれなりし中にもは、此処の文が全体に殿の内心文文として、「思ひたまへりしけしき」は女房たちの話で語られた上の様子であり、それを聞いた殿の印象がこの「あはれなりし」であり、以下に更にその殿の心象の具体例が語られる、という筆致らしい。で、是が殿の内心文であることの明示を文頭に補語する。

\*雪降りたりし暁に立ちやすらひて(雪が降っていた新婚三日目の早朝に東の対へ帰った時に、直ぐに女房たちが部屋の戸を開けずに、少し廊下に待たされた時に)、わが身も冷え入るやうにおぼえて(殿自身も冷え切るように思えて)、空のけしき激しかりしに(雲行きが悪い日に)、いとなつかしうおいらかなるものから(布団の中にいらした上は、とても優しい表情で物静かながらも)、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し(袖をたいそう涙で濡らしたままで顔を隠して)、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを(せめてもと誤魔化しなされるような心根の可愛らしさであったのを)、夜もすがら(夜通し)、\*夢にても(あの日のように夢であっても)、またはいかならむ世にか(上に再びどうしても会いたい)と、思し続けらる(と殿は思い続けられなさいます)。 \*雪降りたりし暁に立ちやすらひては注に<女三の宮の降嫁の三日目の夜明け方の出来事。>とある。若菜上巻六章六段の、今から十二年前の「如月の十余日」(若菜上巻六章一段)に、殿が新婦の宮の部屋に三日通いをした早朝に、夢枕に立った紫の上に自責の念を覚えて、まだ暗い内に東の対に帰った日の事、なのだろう。その時の上の様子は「すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくなつかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし」(若菜上巻六章六段)とあった。 \*「夢にても」は「雪降りたりし暁」の胸騒ぎも上が「かの御夢に見えたまひければ」(若菜上巻六章六段)であったことに掛けて、あの時と同様の「またはいかならむ世にか(再会は何時できるのか)」と願う気持なのだろう。

曙にしも(この日もちょうど曙時分に)、曹司に下るる女房なるべし(部屋に下がる女房なのだろうが)、

「いみじうも積もりにける雪かな(ひどく積もった雪ですねえ)」

と言ふ声を聞きつけたまへる(という声を聞き付けなきて)、ただその折の心地するに(十二年前の雪の日を思い出すが)、御かたはらの寂しきも(殿は隣に上のいない寂しさが)、いふかたなく悲し(言いようもなく悲しく、こう独詠なさいます)。

「憂き世には行き消えなむと思ひつつ、思ひの外になほぞほど経る」(和歌 41-03)

## 「雪消えそうなはかなさも、積もるほど降るやるせなさ」(意識 41-03)

\*注に<源氏の独詠歌。「行き消え」と「雪消え」、「経る」と「降る」の掛詞。「消え」と「降る」は「雪」の縁語。『異本紫明抄』は「憂き世には行き隠れなでかき曇りふるは思ひのほかにもあるかな」(拾遺集雑上、五〇四、清原元輔)を指摘。『集成』も引歌として指摘する。『一葉抄』は「世の中のうけくにあらぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし」(古今集雑下、九五四、読人しらず)を指摘。>とある。拾遺集の参照指摘の方が的確だ。というより、当歌は清原元輔の歌の本歌取りくらいの趣きなんじゃないのか。確かに、「雪消えなむ」の方が「行き隠れなで」よりも<浮世のはかなさ>がよく表現されているような気はする。が逆に、「かき曇りふるは思ひのほかにもあるかな」は「行き隠れなで」によく呼応した歌筋で「憂き世」の遣る瀬無さがよく表現されている。それに比して「思ひつつ思ひの外になほぞほどふる」は如何にも後付けの辻褃合わせといった間抜けな印象だ。それに大体が、「ゆき」と「ふる」の語用をそのまま踏襲したのでは、その発想こそがこの歌の詠み方での工夫の生命線なんだから、これじゃ、藤式部はとて清少納言をあしらった事にはならないどころか、藤原為時が清原元輔の後塵を拝しているようにさえ見える。良いんだろうか。

### [第三段 中納言の君らを相手に述懐]

例の(いつもの朝の起床所作で)、紛らはしには(上の思い出を紛らわせようと)、\*御手水召して行ひしたまふ(殿は洗面をなさって仏前供養をなさいます)。\*「御手水(みてうづ)」は今ではむしろ<便所>だが、それも含めて<洗面>とも言う。

埋みたる火起こし出でて(御居間には、消えかかっている火を起こし直して)、御火桶参らす(火鉢を殿に差し上げます)。\*中納言の君、\*中将の君など、御前近くで御物語聞こゆ(中納言の君や中将の君などの女房が近くに控えて話し相手を勤めて慰め申し上げます)。\*「中納言の君」というと、葵巻二章八段での葵の上の御忌中での話に「中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど、この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず」と語られていた葵の上付きの女房がいたが、それはもう三十年前の話であり、此処では殿ないし紫の上付きの女房のことで別人なのだろうが、他にそれらしい女房の記事がどこかにあったらどうか。全く人物像がつかめないが、作者は平気でこういう書き方をしているのか。それにまた、何一つと注釈も無い。ただ、「中納言の君」や「中将の君」という呼称は、何処の屋敷にも居たような、それなりに使い勝手の良い通り名だったような感じもあって、こういう言い方をするだけで女房同士ではおよその人物像がつかめた、ということだったのかもしれない。とすれば、当時の生き生きとした現代語も、今となっては殆んど符牒だ。\*「中将の君」は、光君 26 歳の須磨退去の際の須磨巻一章五段に、「わが御方の中務、中将などやうの人びと、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、何ごとにつけてかと思へども」と不満ながらも、当事 18 歳の若妻だった西の対の紫君に預けられる、という記事があった二条院東の対に仕えていた御手付き女房のことだろうか。もう 26 年前のことだ。だとしたら、若く見積もっても 40 歳代半ばあたりの古女房だ。が、下文にこの「中将の君」については少し詳しく触れられていて、全く別人の、相当に若い召人らしい説明がある。となると、場面の絵の趣きに俄然と華やかさが増して来るので、「中納言の君」も同様に古女房などではなく、むしろ暗く落ち込むのを「紛らはし」て慰める若女房を想定すべきなのだろう。

「独り寝常よりも寂しかりつる夜のさまかな(上が思い出されて独り寝がいつになく寂しく思える夜だった)。かくてもいとよく思ひ澄ましつべかりける世を(それでも我慢して過ごせるとい

うのに)、はかなくもかかづらひけるかな(取るに足らない女相手に、その場限りの扇情で関わって来たものだ)」と、うちながめたまふ(と殿は力なく庭を眺めなさいます)。

「我さへうち捨てては(と言って、自分までが出家しては)、この人びとの(この女房たちが)、いと嘆きわびむことの(いっそう嘆き迷うであろう事が)、あはれにいとほしかるべき(哀れで残念だ)」など、見わたしたまふ(などと部屋を見渡しなさいます)。

忍びやかにうち行ひつつ(静かに仏前作法をして)、経など読みたまへる御声をお経を読み上げなされる殿のお声を)、よろしう思はむことにてだに涙とまるまじきを(結構な事と思うだけでさえ涙が止まりそうもないのを)、まして(まして、こうして近しく殿と紫の上の思い出話を申し上げるのは)、\*袖のしがらみせきあへぬまであはれに(涙を袖では押さえきれないほど悲しくて)、明け暮れ見たてまつる人びとの心地(朝に夕に殿をお世話申し上げる女房たちの気持は)、尽きせず思ひきこゆ(いつまでも上の逝去を残念にお悔やみ申ししていたのでした)。 \*「袖のしがらみ」はく涙を袖でおさえること。>と古語辞典にある。「しがらみ」は大辞泉に《動詞「しがら(柵)む」の連用形から》とあり、具体的にはく水流をせき止めるために、川の中にくいを打ち並べて、それに木の枝や竹などを横に結びつけたもの。>を指すとあり、一般語用ではく引き留め、まわりつくもの。じゃまをするもの。>とある。絵柄としては、袖を引き摘んで涙を押さえた時の袂のシワを波に見立てた言い方のように、歌語めいた洒落た言い回しにも聞こえる。が、それだけに風雅に流れ過ぎて、絵としては味のある風情でも、言い方としては「袖のしがらみせきあへぬ」は、私などが言うのも僭越だが、技巧が鼻に着く煩い印象だ

「この世につけては(現世については)、飽かず思ふべきこと(不足に思うことは)、をさをさあるまじう(少しも無いような)、高き身には生まれながら(高い身分には生まれたものの)、また人よりことに(一方では人一倍)、\*口惜しき契りにもありけるかな(収まりの悪い夫婦関係を見る前世の因縁ではあったようだ)、と思ふこと絶えず(と考えること頻だ)。 \*「口惜しき契り」は注にく光る源氏の「口惜しき契り」という言葉の背後にある実態が何をさしてそう言うのか、実は、よく分かっていない。>とある。面白い注だ。が、「よく分かっていない」なりに、概略ぐらひは示して欲しい。「ちぎり」はく前世からの因縁による現世での人間関係>を言うらしく、中でもく夫婦仲、男女の縁>を指す事が多いようだし、この物語で取り上げられている主たる話題も正に其の様相だ。だから、広く見れば、桐壺帝と桐壺更衣との縁から始まり、その結果としての幼くして母に死に別れた更衣腹の王子という源氏殿の立場も主題たり得るかとも思うが、やはり藤壺宮との不倫に始まる規格外の男女関係に生きた人生が、その「口惜しさ」の大きな部分を占めるように見える。で、紫の上を看取った今となつては、改めて藤壺宮への満たされぬ思いが全てを規定していたかにも思えるが、それは結果論なのかも知れない。いや、結果論と言っても、最初から作者に此処までの構想があつての物語構築ではあつたとしても、とは即ち、その配役にたとえ藤壺宮の伏線があつたにせよ、紫の上も葵の上も六条御息所も夕顔も六姫も明石君も、またその他の女たちも、それぞれ独自の存在とその意味を持っていたのであり、その正に劇的な際立った個性はそれ自体で相当に実態を主張していて、逸話で片付く位置付けでもない。また、この紫の上の忌明けという時機からしてく先立たれた思い>みたいな喪失感も目に付くが、それでもやはり此処では「高き身には生まれながら」と生い立ちからを振り返って総括を試みている文意なので、的は絞り切れないとしても、全体を通してのく収まりの悪い男女関係>を含んでいることだけは確かかと思う。

世のはかなく憂きを知らすべく(この世がはかなく辛いものだ)と私に知らせるべく)、仏などのおきてたまへる身なるべし(仏などがそうお決めになった身の上なのだろう)。それをしひて知ら

ぬ顔にながらふれば(それを我を張って知らん顔をして生き永らえて来たので)、かく今はの夕べ  
近き末に(この最期に近い晩年に)、\*いみじきことのとぢめを見つるに(女三の宮と結婚して紫の  
上を悲しませるという、愚かさの極みを見ることになって)、宿世のほども(因縁の悪さも)、み  
づからの心の際も(自分の性格の悪さも)、残りなく見果てて(残らず見終えて)、心やすきに(諦  
めも着いて)、\*今なむ露のほだしなくなりたるを(今となつては現世への未練も無くなったが)、  
これかれ、かくて(この者たちがこのように)、ありしよりけに目馴らす人びとの(上が存命中か  
ら特に親しく仕えてきた女房たちなので)、\*今はとて行き別れむほどこそ(私の出家で生き別れ  
ることになるのが)、今一際の心乱れぬべけれ(最後の心残りだ)。いとかなしかし(切りもない  
繰り言で)。悪ろかりける心のほどかな(往生際の悪い事だ)」 \*「いみじきことのとぢめ」は<愚かさ  
の極み←最悪の事態>みたいな言い方、かと思う。「かく今はの夕べ近き末に」というのだから、その「事態」は最近  
の事柄を指していて、ということは、最後に紫の上を悲ませた女三の宮との結婚を後悔する気持なのだろう。 \*  
「今なむ」は出家に際して、の意だろう。注には<『源氏物語事典』は「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人  
こそほだしなりけれ」(古今集雑下、九五五、物部吉名)を指摘。>とある。 \*「今はとて」は注に<『集成』は「私  
の出家で」と訳す。>とある。従う。

とて(と言って殿は)、御目おしのごひ隠したまふに(涙をおし拭いなさるが)、紛れず(隠し切  
れずに)、やがてこぼるる御涙を(そのままこぼれる御涙を)、見たてまつる人びと(押し申し上げ  
る女房たちは)、ましてせきとめむかたなし(それ以上に涙を抑えようもありません)。さて(そし  
て)、うち捨てられたてまつりなむが憂はしさを(殿が出家で見捨てて行っておしまいになるのを  
辛く思い申し上げる気持ち)、おのおのうち出でまほしけれど(女房たちは各自が言い出したか  
ったが)、さもえ聞こえず(とてもそのような差し出がましいことは申し上げられず)、むせかへ  
りてやみぬ(涙に咽るばかりなのでした)。

かくのみ嘆き明かしたまへる曙(こうしたことばかりで泣き明かしなされた明け方や)、ながめ  
暮らしたまへる夕暮などの(力無く庭を眺め暮らしたる夕暮れなどの)、しめやかなる折々は  
(しんみりした時には)、かのおしなべてには思したらざりし人びとを(かの特に可愛がってい  
らっしゃった御手付き女房たちを)、御前近くて(御側近くに侍らせて)、かやうの御物語など  
をしたまふ(同じような話を殿はなさるのでした)。

中将の君とてさぶらふは(中将の君という女房は)、\*まだ小さくより見たまひ馴れにしを(まだ  
童女の幼い時から親しく近づけていらっしゃったが)、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけ  
む(殿はごく人目を忍んで見過ごしなさない事があったようだが)、いとかたはらいたきことに  
思ひて(女房の方は紫の上に気兼ねして)、馴れきこえざりけるを(殿に馴れ馴れしくし申しな  
かったが)、かく亡せたまひて後は(このように上が亡くなった後は)、その方にはあらず(召人  
としてでは無しに)、人よりもらうたきものに心とどめたまへりし方ざまにも(他の者よりも  
上が可愛がっていらっしゃった女房として)、かの御形見の筋につけてぞ(上を思い出す形見  
として)、あはれに思ほしける(殿は懐かしくお思いになります)。心ばせ容貌などもめやす  
くて(気立てや容姿などが好ましく)、\*うなむ松におぼえたるけはひ(上が成長を楽しみに  
して植えた松の幼木のように、この女房が思えるので)、\*ただならましよりは(直ぐに  
出家を急ぐよりは)、らうらうじと思ほす(その成長を見守りたいと殿はお思いになります)。 \*  
「まだ小さくより見たまひ馴れにし」は<童女の頃から見慣れていなさった>ということ  
だろうから、この「中将の君」は二条院東対からの古女房ではなく、

紫の上の童女だった別人物なのだろう。童女で印象深いのは、少女巻七章六段の六条院新築後の秋好中宮と紫の上の秋の和歌贈答場面に登場した上品な子が居たのを思い出すが、その遣いの子は秋好中宮付きの童女だったし、十七年ほども前のことなので、今なら中年だ。此处で改めて初めて紹介するように「小さい時から見慣れていた」と語られる、という、然程には深い仲でもなく、「いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ」とある最近の召人っぽい説明っぷりからすると、この「中将の君」は相当な若女房であるらしい。まだ20歳前かも知れない。実の娘の明石中宮とほぼ同じ年くらいの、今上帝の妹で兄院の娘である14歳の女三の宮と結婚したという源氏殿の少女趣味からすれば、御年52歳になっても20歳前くらいの側女がいても不思議では無い、のかも知れない。\*「うなみ」は「昔、7、8歳の童児の髪をうなじのあたりで結んで垂らしたもの。また、女兒の髪を襟首のあたりで切り下げておくもの。うないがみ。>また<髪形を「うなみ」にした童児。幼い子供。>と大辞泉にある。注には「うなみ松」を「完訳』は「これから生長する小松。『河海抄』などは、墓に植えた松で、中将の君を亡き紫の上の形見の意に解す。情をかけた召人だけに、いよいよ故人の形見と思われる」と注す。>としてある。成長を楽しみに思う気持ちを込めた言い方なのだろうか。それにしても、此处で「うなみ松」という語を持ち出す意図が、何かの謂れに拠るのか形態に似せているのか丸で分からず、与謝野訳文の「喪服姿がうない松に似た」というのも手応えが無い。で、分からないながらも、「かの御形見の筋につけてぞ」の文意に沿うなら、紫の上が「成長を楽しみに植えた松」と考えてみることにする。相当に若い女なのだろうか。\*「ただならまし」が分からない。是が分からないから「うなみ松」の語用も見当が付かない、という面もある。その上、始末の悪いことに「らうらうじ」まで分かり難い。となると、この文意を解く唯一の手掛かりは「心ばせ容貌などもめやすくて」になってくる。「らうらうじ」は「物慣れている。物事に巧みである。>と大辞泉にあり「老練だ」に近い語意だが、漢字表記は「勞勞じ」とあり、古語辞典には「可愛らしい。美しい。>ともあって、「勞」を「功勞、熟練」よりは「骨折り、いたわり」の方に重点を置けば、「らうらうじ」は「いじらしい」>くらいの意にならないだろうか。というのも、「目安く(好ましく)」「うなみ松におぼえたるけはひ(成長が楽しみ)」な客体が「物慣れている」という文意は変だし、また「可愛い、美しい」というのも改まって言うほどの内容ではなく、いっそ「らうらうじ(いじらし)」>殿には思えて出家の決意を鈍らせる(→熟考を誘う)、みたいな筋が据わりが良いように見えるからだ。即ち、「ただならまし」も「らうらうじ」も中将の君に対する形容ではなく、源氏殿の状態を説明する修辞の語用だと取ってみる。で、「ただならまし」は「直ちに出家すべきだ→即決する」。我ながらゴリ押しの曲解には見えるが、それでも今のところ、この筋が私には据わりが良い。

#### [第四段 源氏、面会謝絶して独居]

疎き人にはさらに見えたまはず(殿は親しくない人には全くお会いなさいません)。上達部なども(高官たちや)、むつまじき御兄弟の宮たちなど(親しい御兄弟の宮たちなども)、常に参りたまへれど(頻繁に御見舞に御見えになったが)、対面したまふことをさをさなし(直接に対面なさる事は全くありません)。

「人に向かはむほどばかりは(人に会う時だけは)、さかしく思ひしづめ(冷静に落ち着いて)、心収めむと思ふとも(しっかりしていようと思っても)、月ごろにほけにたらむ身のありさま(何ヶ月も呆然としている自分の姿が)、かたくなしきひがことまじりて(見苦しい粗相なども伴って)、末の世の人にもて悩まれむ(晩節を汚し)、後の名さへうたてあるべし(後世の評判にも障るだろう)。思ひほれてなむ人にも見えざる(惚けてしまったので人に会わないようだ)、と言はれむも、同じことなれど(と噂されるのも同じような悪評だが)、なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも(それでも伝聞で想像する衰えよりも)、見苦しきことの目に見るは(見苦しさを目の当たりにするほうが)、こよなく際まさりてをこなり(この上なく格段に情けない)」

と思せば(とお思いになるので)、大将の君などにだに(殿は大将君に対してさえ)、御簾隔ててぞ対面したまひける(御簾越しに対面なさいます)。

かく(このように上の死去で)、心変りしたまへるやうに(私が出家を考えたように)、人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはと(人が噂立てる時期だけでも我慢していようと)、念じ過ぎしたまひつつ(出家を考えて日々を過ごしながらも)、憂き世をも背きやりたまはず(殿は現世未練も断ち切れてはいらっしゃいませんでした)。

御方々にまれにもうちほのめきたまふにつけては(御方様方にも稀ながらも少しお会いになる時にも)、まづいとせきがたき涙の雨のみ降りまされば(とにかく止め処なく涙が溢れて)、いとわりなくて(どうにもならず)、いづ方にもおぼつかなきさまにて過ぎしたまふ(どちら様にもお出向きなさないまま過ごさいます)。

後の宮は、内裏に参らせたまひて(明石中宮は御所にお帰りあそばして)、\*三の宮をぞ(三の宮だけを)、さうざうしき御慰めには(寂しさを紛らすお慰めにと)、\*おはしまさせたまひける(この六条院にお住ませ申しなさいました)。\*「三の宮をぞ」は<三の宮だけを特別に>だから、紫の上が育てていたもう一人の孫の姫宮は中宮が御所へ連れ帰った、ということなのだろう。中宮は帝の昼の御座近くに別室を設けていたのだろうが、後宮での基本的な部屋は相変わらず桐壺だったか。後宮事情は最近では語られないので不明だが、やはり中宮の部屋が最奥では変か。\*「おはしまさせたまひける」は<(この六条院に)お留めさせ申しなされた>。此処の舞台は六条院だろう。、上に「御方々にまれにもうちほのめきたまふ」とあり、忌明けの新年を二条院で迎えるというのも考え難く、年始の客を迎えるのは、いくら会わないとは言え、やはり六条本院だろう。

「婆の(ばばの、お婆が)\*のたまひしかば(仰っていらしたので)」 \*「のたまひし」は注に<匂宮の詞。『完訳』は「紫の上が匂宮に、二条院西の対の紅梅を大事にせよと遺言」と注す。「御法」巻(第一章六段)に語られている。>とある。御法巻一章六段は明らかに二条院が舞台で、上は三の宮に「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に、心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむ折は、仏にもたてまつりたまへ」と言い聞かせていた。この「この対の前なる紅梅と桜とは」を<この二条院西の対の前庭の紅梅と桜とを>と取れば、此処の舞台は<六条院東の対>なので、下にある「対の御前の紅梅」は作者の錯誤のようにも見える。が、大昔の話ならともかく、御法巻は昨夏あたりの話であり、半年前くらいの事を、それも此処まで具体的な事を間違えるというのも考え難い。となると、残る解釈は「この対の前なる」という上の発言は<私の部屋の前庭の>という意味であり、二条院西の対にも、六条院東の対にも、その前庭には<紅梅と桜>が植えられていて、それが紫の上の意図した春の町の風情だった、と取る他は無い。この当巻当章一段にも「紅梅の下に歩み出でたまへる御さまの」と兵部卿宮が東の対の前庭の紅梅の下を通過して源氏殿の部屋に向かってくる様子が語られていて、此処の場面の下話にもなっていた。

とて(と三の宮が言って)、対の御前の紅梅は(対の前庭の紅梅を)、いと取り分きて後見ありきたまふを(それは格別に気に掛けて世話を見て回っていらっしゃるのを)、いとあはれと見たてまつりたまふ(殿はとても感じ入って拝し申し上げなさいます)。

如月になれば(二月になると)、\*花の木どもの盛りなるも(梅の木々が花盛りになると言っても)、\*まだしきも(まだ蕾だが)、梢をかしう霞みわたれるに(梢が風情豊かに霞掛かって)、かの



御形見の紅梅に(上の形見の紅梅には)、\*鶯のはなやかに鳴き出でたれば(ウグイスが賑やかに囀りだしたので)、立ち出でて御覧ず(殿は縁側に出て御覧になります)。\*「まだしきも」はくいまだ完了していないさま>を言う形容詞「まだし」の連体形「まだしき」に逆接の接続助詞「も」が付いた言い方で、意味はく未だ至らずながらも→まだ盛りにならないが→まだ蕾だが>ということのようだ。\*「花」は春には桜を言う事が多い。が、此処では「如月」とあり、文脈上も他の花は有り得ない、と渋谷訳文に示されている。\*「ウグイス」は三の宮を見立てた言い方、でもありそうだ。

「植ゑて見し花のあるじもなき宿に、知らず顔にて来ゐる鶯」(和歌 41-04)

「誰が植えたか知らないが、花咲けば来る梅に鶯」(意識 41-04)

\*ざっと見て、「来ゐる鶯」という言い方に特異な印象を受ける。「知らず顔にて」というのだから、他の事情など構わずに自分勝手に、みたいな強引さが有りつつも、他者に構う力もない弱い存在の各個体の「来居る(来て居座る)」というそれなりの精一杯の働き掛けの集合で、何時の間にか季節は動いて行く、みたいな無常感も漂う。注にはく源氏の独詠歌。『河海抄』は「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主人なしとて春を忘るな」(拾遺集雑春、一〇〇六、菅原道真)「梅が枝に来ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」(古今集春上、五、読人しらず)を指摘。『集成』は「季節は変わらず廻りくるのに対し、人事の変りやすさを嘆く気持」。『完訳』は「「花のあるじ」は紫の上。変らざる自然に対し、人の生命のはかなさを嘆く歌。「鶯」に、紫の上を喪った自身の孤独を形象」と注す。>とある。「花のあるじ」は道真の歌に、「来ゐる鶯」は古今集の歌に、如何にも習っているように見える。ただ、三の宮が「婆ののたまひしかば」と言っているのに、殿はこの歌で「あるじもなき宿に知らず顔にて来ゐる鶯」と詠んでいて、是が軽口なのか達観なのか、達観めいているから戯れなのか、三の宮への贈意の有無は見え難いが、殿自身は面白がってはいるようだ。

と(と殿は)、\*うそぶき歩かせたまふ(口ずさんで好々爺を演じなさいます)。\*「うそぶく」はく吟詠する>でもあるが、口を突き出してくおどける←空惚ける→話題を逸らす>みたいな語感もある。「歩く(ありく)」はく～して過ごす>でありく～のように立ち回る>でもある。

[第五段 春深まりゆく寂しさ]

\*春深くなりゆくままに(春が深まるに連れて)、御前のありさま(六条院東の対の前庭の風情は)、いにしへに変わぬを(上の生きていた昨年までと変わりは無いが)、めでたまふ方にはあらねど(喜ぶ気持ちにはなれないが)、静心なく(花木が勢いよく芽吹いて命を謳歌しているようなのが落ち着かない気分)、何ごとにつけても胸いたう思さるれば(何を見るにつけても無常が思い知らせれて胸が痛むように思われなされるので)、おほかたこの世の外のやうに(専ら現世を避けるやうに)、鳥の音も聞こえざらむ山の末ゆかしうのみ(鳥の声さえ聞こえないほどの山奥へ行ってしまうやうに)、いとどなりまさりたまふ(殿はますますお成りでした)。\*「春深くなりゆくままに御前のありさま」は注にく『細流抄』は「これより六条院のことなり」。『完訳』は「三月に入る。以下、六条院か」と注す。>とある。以下に明らかに此処が六条院だと示す記事でもあるのだろうか。しかし、ここまでも、舞台が二条院であったという明示は無かったのではないか。いや確かに、御法巻二章までは舞台が二条院である事は明示されていた。それも、物語の重要な要素として位置付けられる舞台設定だったような印象だ。が、御法巻三章以降は此処に至るまで、舞台が二条院との明示はなく、むしろ御忌は六条院で営まれたとのように私は読ん

で来ていて、わざわざその点に関してのノートもして、未だ破綻を見ていない、と記憶する。特に、忌明けの年明けからは、ということは本巻冒頭からはますます以て、舞台が六条院との印象を強くして来た。それを、「これより」と此処に注す根拠は何か。少なくとも、「春深くなりゆくまに御前のありさま」という語りの中には示されていない。もし、以下に舞台が六条院であるとの明示があるなら、私は少なくとも年明けから源氏殿は六条院に戻っていると思うし、実は埋葬後の忌中は、当然に二条院はそれなりに片付けて、六条院で籠もったようにさえ思う。特に、大将君が実家に籠もったということには、二条院よりは六条院でなければならぬ気が強くする。ただ、そうであるなら絶対に明示すべきで、明示が無い、ということは最大の懸念であり疑問ではある。

\*山吹などの(山吹などが)、心地よげに咲き乱れたるも(気持良さそうに思う存分咲き誇っているのも)、\*うちつけに露けくのみ見なされたまふ(殿はしみじみ見ることもなく自分の涙がちな目の所為で露に濡れているように見做しなさいます)。 \*「山吹」は今の暦で四月に咲く花だから、旧暦なら三月の晩春の花。夕顔の撫子であり、藤原殿の実子の玉鬘であり、今は藤原右筋筆頭家の正妻となっている源氏殿の養女を、初音巻ではこの山吹に例えていた。 \*「うちつけ」は<にわか、急変、軽々しい>などとあり唐突な出し抜け感のある語だが、大辞林に<じっくり観察しないさま。ちょっと見。>ともあり、此処ではその意が「見做す」に良く対応する。

\*他の花は(前庭の他の花は)、一重散りて(一重桜は既に散っていて)、八重咲く花桜盛り過ぎて(八重桜も盛りを過ぎて)、樺桜は開け(樺桜が花を開き)、藤は後れて色づきなどこそはすめるを(藤が後れて色付き出していたりするような具合になっていて)、その遅く疾き花の心をよく分きて(春の花々の咲く時期の遅い早いを良く心得て)、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば(祖母上が色々な種類の木を植えて置きなさいたので)、時を忘れず匂ひ満ちたるに(庭は絶えず春の花が咲き満ちるところで)、若宮(御孫君の三の宮は)、 \*「他の花は」は「その遅く疾き花の心をよく分きて」に繋がって「時を忘れず匂ひ満ちたる」という紫の上の周到さなのか、「花の心をよく分きて」という人柄なのか、祖母の懐の深さなのか、そんなようなものを示す文意のようだ。が、こんな風な庭の説明の仕方は、この物語での今までの語り口からすると、ちょっと珍しい印象だ。風情の描写よりも上の人柄を示そうとしているからか。「かばざくら」は野分巻で上自身の形容に例えられていたが、この「樺桜」が咲くことで桜の木々が全て咲いたことになるような語り口なので、最も遅咲きの桜という位置付けらしい。

「まろが桜は咲きにけり(私の桜は全て咲いた)。いかで久しく散らさじ(どうしたら何時までも散らさないでいられるだろう)。木のめぐりに帳を立てて(木の回りに囲い箱の几帳を立てて)、帷子を上げずは(幕を垂らしておけば)、風もえ吹き寄らじ(風から守れるだろう)」

と、かしこう思ひ得たり(と良い考えを思いついた)、と思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも(と仰る宮の顔がとても可愛らしいのにも)、うち笑まれたまひぬ(殿は微笑まれました)。

「\*覆ふばかりの袖求めけむ人よりは(空を覆って風を止めようと大きな袖を求めた昔の歌人よりは)、いとかしこう思し寄りたまへりしかし(ずっと増しな考えを思い付きなさいたものだ)」など(などと殿は)、この宮ばかりをぞもてあそびに見たてまつりたまふ(この宮だけを遊び相手と思い申し上げていらっしやいます)。 \*「覆ふばかりの袖求めけむ人」は注に<以下「思し寄りたまへり

しかし」まで、源氏の心中。『源氏積』は「大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（後撰集春  
中、六四、読人しらず）を指摘。現行の注釈書でも指摘する。>とある。

「君に馴れきこえむことも\*残り少なしや(あなたと一緒に遊んでいられるのも残り少ないだろ  
うな)。命といふもの(寿命自体は)、今しばしかかづらふべくとも(もう少し在るかも知れないが)、  
対面はえあらじかし(出家したら、会えなくなるので)」 \*「残り少なしや」は注に<源氏の詞。「君」  
は句宮をさす。やがて出家すべきことを言う。>とある。

とて(と言って殿が)、例の(いつも考えている出家を念頭に)、涙ぐみたまへれば(涙ぐみなさ  
ると)、いとものしと思して(宮は嫌がりなさって)、

「\*婆ののたまひしことを(亡くなった、御婆様が仰ったのと同じ事を)、まがまがしうのたま  
ふ(不吉にも仰る)」 \*「婆ののたまひしこと」は御法巻一章六段の「まろがはべらざらむに、思し出でなむや」  
だろうか。紫の上は死を、源氏殿は出家を、それぞれ言っているのだが、会えないと言って涙ぐむ、というのは共  
通している。

とて、伏目になりて(と言って伏し目になって)、御衣の袖を引きまさぐりなどしつつ(御着物  
の袖を引き出して涙を拭いては)、紛らはしおはず(泣き顔を紛らわしなさいます)。

隅の間の高欄におしかかりて(縁側の角の欄干に寄り掛かって)、御前の庭をも(前の庭から)、  
御簾の内をも(後の御簾内まで)、見わたして\*眺めたまふ(見渡して殿は紫の上を偲びなさいま  
す)。女房なども(女房などの中にも)、かの\*御形見の色変へぬもあり(忌中の喪服のままの者も  
居て)、例の色あひなるも(平服に戻ったものでも)、綾などはなやかにはあらず(色模様などは地  
味にしていました)。 \*「ながむ」は此处では<亡き人を偲ぶ>だ。そこまで具体既定した語用例は手許の辞書  
には無いが、むしろ此处での文意自体はそれ以外には無いだろうし、古語辞典に<感情を込めて見入る>という説  
明があるので、その語意をこの場面に当てはめれば一応の汎用説明は着くかと思う。 \*「御形見の色」は<忌中の喪  
服>のことらしい。訳文を見て、確かにそういう意味らしいと納得するが、「色」が<表情・態度→服飾→服喪・喪  
服>を其と無くでは無く具体的に示すという語用に少し戸惑う。「例の色あひ」や「綾など」も具体的な描写のようだ。  
是ぞ女房言葉、の趣か。

みづからの御直衣も(殿御自身の平服上着も)、色は世の常なれど(色は喪服の灰黒では無いが)、  
ことさらやつして(沈んだ色合いが目立たないようにして)、無紋をたてまつれり(無地のものを  
お召しになっていました)。御しつらひなども(御部屋の装飾も)、いとおろそかにことそぎて(ご  
く質素に簡略にして)、寂しく心細げにしめやかなれば(賑わいも無く力弱そうに静まった暮らし  
ぶりだったので)、

「今はとて荒らしや果てむ、亡き人の心とどめし春の垣根を」(和歌 41-05)

「お別れ会が終わっても、この会場は名残惜しい」(意識 41-05)

\*注に<源氏の独詠歌。『完訳』は「「今はとて」は、いよいよ出家となれば、の気持。紫の上の丹精した春の庭が  
やがて荒廃するだろう、と嘆く歌」と注す。>とある。が、「今はとて」は<いよいよ今この時を以て>という、そ

れ自体は決意を示す言い方だろう。この晩春を待って、いよいよ上にて心の中で別れを告げ、源氏殿は出家を決意した、と読むことこそがこの歌の味わいなのではないだろうか。でなければ、この歌自体には然程の殊更に詠むほどまでの風情は無い、かと思う。出家の決意については、「あらしやはてむ」こそが<現世に在らずして出家しよう>という明示だ。「あらし」の濁音を「あらし」と訛るのは上品だということでののか、和歌では許容される、らしい。遊女言葉に通じる趣か。「や」は反語文意を示すが、語感としては出家文意では感嘆詞語用の強調で、庭の荒廃文意では反実期待感が込められる。「はてむ」の「む」は出家では意志で、荒廃では推移予測。この複雑な文意は下文に明示したい。しかし、出家を決意したからは、後は在るがままで良い筈で、「心とどめし」に拘る現世未練というか迷いがあるなら、出家は思い止まるべきなのではないのか。部外者だし他人事ながら、そんな風に思える句。だから、「あらしやはてむ」は<出家を決意したもの>とは言い換えずに、「今はとて在らじや果てむ」が丸々「亡き人」に掛かる修辭で<今となっては上が死去してこの世に在らずという事を受け入れたが>と読んで置く。

人やりならず悲しう思さるる(と出家を決意なさるものの、上との別れを我ながら物悲しくお思いになります)。

#### [第六段 女三の宮の方に出かける]

いと\*つれづれなれば(とても退屈で寂しい気分の日だったので)、入道の宮の御方に渡りたまふに(殿は入道宮のお部屋にお出向きなさったが)、\*若宮も人に抱かれておはしまして(三の宮も女房に抱かれて殿に付いていらっしゃって)、\*こなたの若君と走り遊び(こちらの若君と走り回って遊んでは)、花惜しみたまふ心ばへども深からず(婆様に言い付けられなさった、花を惜しんで手入れなさることも忘れた者同士のように)、いといはけなし(何とも幼いことです)。 \*「つれづれ」は大辞林に<(形動ナリ) [1] するべきことがなくて所在ないさま。退屈。無聊(ぶりよう)。[2] 何事も起こらずさびしいさま。静寂。>とある。何もする事が無くて退屈な日、ではあったのだろうが、上文からの文脈からすれば、紫の上への別れに一区切りが着いて、出家に対する心の整理も着いて、「する事が無い」というよりは<思い煩う事が無くなった>という意味に思えるが、退屈で寂しい、という表面の方を取って言っている語りの意図は大事にしたい。如何見えているかが全てである場面、というのが世の中のこと、であるような気もする。 \*「若宮」は帝と明石中宮との三の宮で、五年前の夏生まれ、この年で6歳。 \*「こなたの若君」は女三の宮と故衛門督藤原君との不義の子で、源氏殿の末子としてこの中宮の母屋で育てられている。四年前の一月生まれで5歳だ。

\*宮は、仏の御前にて、経をぞ読みたまひける(入道宮は仏壇の前でお経を読んでいらっしゃいました)。 \*「宮」は若君を出産した直後に、父親の朱雀院の特別な計らいで、入信した。そして、その宮の出家を知った衛門督藤原君は、完全に闇に臥せられる自分の存在を受け止めてか、遂に死去した。四年前の二月だ。女三の宮は、この年で26歳になる筈で、源氏殿と結婚したのが十二年前の14歳の時で、当時は紫の上もまだ32歳の若さだったが、彼女も去年死去している。衛門督との過ちは五年前の葵祭り近く、衛門督が32歳くらいで、女三の宮は21歳だった。で、翌年の22歳の一月に若君を出産したわけだが、その若君が藤原君との不義の子であることは、源氏殿に既に知られていて、ほぼ、その現実逃避のように出家したのであり、深く仏道に信心していたものでもなく、父の朱雀院が入山していたので、抵抗が少なかった、みたいな印象だった。と言っても、当時の知識階級の常識として仏教の先進性は広く知られていただろうし、仏門への尊敬と信頼は女三の宮にもあって、真面目に修行生活をしていただろうとは推測するが、この幼さの抜けない人物に経験や思索の深みを期待する気にはなれない、というように設定されて来たかと思う。それでも、二年前の夏には持仏開眼法要なども挙げて(鈴虫巻一章)、この宮が修行生活に打ち込んで来た事がこの一文で思い起こされて、妙な感慨を覚える。尤も、女三の宮は登場当初か

ら、私には不思議な存在感がある。朱雀院は兄帝だったのだから相応の存在感が在って当然とは思いますが、その朱雀院の特別な意向を体現しているかのこの宮の存在に、作者が何を意図しているのか、いや、意図と言うよりは、実相としてそうした人間関係があって、その複雑さが面白い、のだとしても、それを書き示すには幾分かの情熱は必要で、その情熱の発源が興味深いところだ。

何ばかり深く思しとれる御道心にもあらざりしかども(特に深い悟りに至りなされた宮の信心でもないのだろうが)、この世に恨めしく御心乱るることもおはせず(この世を悲しんで悩みなさる事もなく)、のどやかなるままに(穏やかに)、紛れなく行ひたまひて(雑事に追われず修行なされて)、一方に思ひ離れたまへるも(仏道一筋に世離れなされていらっしゃるのも)、いとうらやましく(殿にはとても羨ましく)、「\*かくあさへたまへる女の御心ざしにだに後れぬること(このように人生経験の浅くていらっしゃる宮の信仰心にさえ後れを取ってしまっているとは)」と口惜しう思さる(と悔しくお思いになります)。 \*「かくあさへたまへる女の御心ざしにだに後れぬること」と、源氏殿は宮を見て「口惜しう思さる」、というのが作者の主張の、決して全てでは無さそうだが、一端ではあるらしい。女三の宮という存在は、源氏殿にとっては、兄の朱雀院に対する劣等感を示す一面があって、此処の文もその趣がある。ざっと言えば、持てる者は何の苦勞も無く優雅に暮らせる、その優雅さは万人が認める非の打ち所の無い高価値だ。持てざる者は如何足掻いても、その優雅さの真似事はできるが、足掻いた時点で本物の優雅さでは無い。みたいに聞こえる。

閑伽の花の(あかのはなの、仏壇にお供えした花が)、夕映えしていとおもしろく見ゆれば(夕映えしてとても美しく見えたので)、

「春に心寄せたりし人なくて(春に心を寄せていた人が居なくなつて)、花の色もすさまじくのみ見なさるるを(花の色も物足りないばかりに思えるが)、仏の御飾りにてこそ見るべかりけれ(仏にお供えする物として見ればよかったのか)」とのたまひて(と殿は仰つて)、

「対の前の山吹こそ、なほ世に見えぬ花のさまなれ(対の前の山吹はやはりざらには無い立派なものだ)。房の大ききなどよ、品高くなどはおきてざりける花にやあらむ(花びらの大きい所などは、上品に咲こうとは思っていなかった花のようだ)。はなやかににぎははしき方は、いとおもしろきものになむありける(華やかで賑わしい所は、とても印象的だ)。植ゑし人なき春とも知らず顔にて(植えた人がいない春とも知らなそうに)、常よりも匂ひかさねたるこそ(何時にも増して咲き誇っているのが)、あはれにはべれ(哀れです)」とのたまふ(と仰います)。

御いらへに(宮はお応えに)、

「\*谷には春も(谷には春も無縁ですから)」 \*注に<女三の宮の返事。『源氏積』は「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし」(古今集雑下、九六七、清原深養父)を指摘。『集成』は「世を捨てた尼の身にとっては、人の世の悲しみも喜びも無縁であるという気持で言ったもの。女三の宮としては、卑下のつもりであろう」と注す。>とある。「清原深養父(きよはらのふかやぶ)」は<平安前期の歌人。清少納言の曾祖父。元輔の祖父。内蔵大允。藤原兼輔・紀貫之らと親交があった。古今和歌集以下の勅撰集に四〇首入集。家集に「深養父集」がある。生没年未詳。>と大辞林にある。早速に「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、この歌には「時なりける人の、にはかに時なくなりて嘆くを見て、みづからの嘆きもなく喜びもなきことを思ひてよめる」

という詞書があり、その意味は<「時勢を得て盛んだった人が急に凋落し嘆いていのを見て、自分にはそうした嘆きや喜びがないことを思って詠んだ」ということ。>と説明されている。「余所なり」は<関係ない>。だから、「とく散る物思ひもなし(すぐに散るという心配もない)」と無言で唱える分には自虐の傷心だが、是を言明するのは<どうせ私は日陰者>という卑下の表明であり、大事に思われていないことを恨む嫌味だし、「もの思ひもなし」の<知ったことじゃない>という言い放しは酷く突っけんどんだ。

と、\*何心もなく聞こえたまふを(と何気無さを装って申しなさるのも)、 \*「何心もなく」は、自分を「谷」と卑下する事が嫌味になるという自覚も無ければ、「物思ひもなし」が冷たい突き放しの言い回しになることにも気付いていない、という意味なのだろう。ということは当文意は、宮は単に、自分が「光なき」華やかさに無縁の暮らしをしている、ということだけを言った心算で、殿が「植ゑし人なき春とも知らず顔にて」と言ったことの、というか、人が何かを言う時の、その意図や気持には相も変わらずに、いかに無頓着な未成熟振りか、を示しているもの、なのだろうか。「何心もなく」を客観描写と読めば、そういう文意にも見えるが、この「何心もなく」は「聞こえたまふ」た宮の素振りの、その意図を説明している、と読めば、宮は嫌味も突き放しも承知の上で、敢えて「何心もなく」見せた、という語りに読める。というか、宮がその程度の計算も無しに「谷には春も」の古歌を「何心もなく」引き合いに出した、などという読み方は、当時の読者の感性を余りに無視したものだろう。

「\*ことしもこそあれ(何て言い種だ)、心憂くも(実に嫌味な)」と思さるるにつけても(と殿は思えなさるにつけても)、 \*「ことしもこそあれ」は<事もあろうに、選りに依って、言うに事欠いて>みたいな言い方らしい。「し」は強調の副助詞ということだが、過去の助動詞「き」の連体形で確定意を示す語用のようでもあり、つくづく感じ入った語感で、「ことし」には「ものし」に似た不快感があるようだ。その不快感は「心憂し」と明言されているとも読めるが、この「心憂くも」も下に<こそあれ>が付いた少し引いた言い方に思えるので、むしろ「ことし」が不快感で、「心憂し」は宮の<嫌味さ>を言っているような語感だ。注には<源氏の心中。『集成』は「折から、庭前の花を見るにつけても、紫の上を偲び、悲嘆にくれる源氏にとって、「もの思ひもなし」という結句に続く返事は、いかにも思いやりなく響くのである」と注す。>とある。そうなのかも知れない。源氏殿にとっては宮の応答は<いかにも思いやりなく響く>もので、その浅はかさが「心憂し(情けない)」と思えた。源氏殿が宮をそのように見ていた、ということは有り得るし、その殿の目線でこの文が書かれている、と読めば、ある意味では分かり易い語り口のようにも見える。が、読者としては、作者が<宮には明確な紫の上に対する対抗心があり、殿にもそれを訴えている>という事情を此処に示している、とは読んで置くべきなのだろう。

「\*まづ(とにかく)、かやうの\*はかなきことにつけては(このような心の機微に関わることについては)、そのこと\*さらでもありなむかし(その機嫌を決して壊して欲しくない)、と思ふに(と思うものだが)、違ふふしなくてもやみにしかな(それに障る節など無いままに終わったものだ)」 \*「まづ」は注に<以下「なくてもやみにしかな」まで、源氏の心中。紫の上と比較する。>とある。「谷には春も」以降の文は超難解だ。訳文や注釈を見返しながらかみ読み進むが、原文を眺める限りは丸で呪文の趣だ。 \*「はかなきこと」は<取るに足らない些細な事>を言う場合もあるようだが、此処では文脈からして<繊細で微妙な心情>を言っているのだろう。 \*「さらでも」は<左に非ずとも=そうでないようにも>。「ありなむかし」は<有り得るかも知れない→なってしまいそう→なって欲しくない>。

と、いはけなかりしほどよりの\*御ありさまを(と幼かった頃からの紫の上の御姿を)、「いで(いや実に)、何ごとぞやありし(何一つと卒が無かった)」と思し出づるには(と思ひ出されなさっては)、まづ(何につけても)、その折かの折(あの時この時の)、かどかどしうらうらうじう(気が利

いていて気が付いて)、匂ひ多かりし心ざま、もてなし(可愛らしさに溢れた気立てや物腰や)、言の葉のみ思ひ続けられたまふに(言葉などばかりが思い続けられなさって)、例の涙もろさは(いつもの涙もろさとは言え)、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し(ふとこぼれ出てしまうのもとても悲しい)。 \*「御ありさま」は紫の上の<御姿>らしい。分かり難い。

### [第七段 明石の御方に立ち寄る]

夕暮の霞たどたどしく(夕霧の危うさが)、をかしきほどなれば(情緒を誘う趣きなので)、やがて\*明石の御方に渡りたまへり(殿は入道宮のお部屋に引き続いて明石の御方の部屋にお出向きなさいました)。 \*「明石の御方」は何処にあるのか。元々は御方は冬の町に住まいだったが、明石姫の東宮入内に付き添って後宮仕えしてからは、六条院に里下がりしても春の町の寝殿東側の何処か、またはその近くに局を与えられていたように、特に若菜上巻十章から十二章に掛けての明石姫の出産に伴う明石一族の栄光の物語辺りの記事からは、そう思うが、此処で言う「明石の御方」は何処なのかは判然としない。「やがて」が<そのまま>という語感なら、寝殿西母屋から東母屋に移ったような気がするが、どうなのだろう。ただ、明石中宮が御所へ戻っているようなので、やはり御方は元の冬の町に落ち着いている、というのが穏当だろうか。

久しうさしものぞきたまはぬに(久しく殿のお立ち寄りが無く)、おぼえなき折なれば(不意の事だったので)、うち驚かるれど(御方は驚かされたが)、さまようけはひ心にくくもてつけて(落ち着いた態度で丁寧に対応して)、「なほこそ人にはまさりたれ(さすがに人並み以上だ)」と見たまふにつけては(と殿は御方を御思いなさるが)、

「またかうざまにはあらで(またこういう形ではなく)、\*かれはさまことにこそ(紫の上は格別に)、\*ゆゑよしをももてなしたまへりしか(教養深く風情のある作法をも身に付けていらっしやったものだ)」 \*「かれ」は<紫の上>、らしい。 \*「ゆゑ」は物事や作法の<理屈や成り立ちの言われ、意味、知識>。「よし」は実技の<完成度、美しさ>。芸事は何でもそうだろうが、というより、傍目を前提として成り立つ人間の生活様式の全てがそうなのかも知れず、こうした物語の執筆や歌詠みなども同じだろうが、「よし」の無い物は客観的に存在していないことになる、つまり無いに等しいのであって、どんなに深い思索や考察が個人の内的作業としてあっても、「由」の無い「故」は他人には分からない。しかし、社会的存在の人間が客観的に確からしい「故」を得るには、必ず自分なりの「由」を作りながらでなければ<内実>を失う。逆に言えば、「由」のためには必ず何らかの「故」が必要で、双方は補完関係だ。ただ、「由」の客観的評価は天分に負うところが大きい、とは思う。明石御方にも独自の「ゆゑよし」はあったのであり、しかし、それでも紫の上の「由」は格別だった、のだろう。

と、思し比べらるるにも(と故人とを思い比べられなさって)、面影に恋しう、悲しさのみまされば(面影が恋しく悲しみばかりが募るので)、「いかにして慰むべき心ぞ(如何紛らせば良いものか)」と、いと\*比べ苦しう(と比べればとても双方が愛しく思えて)、\*こなたにては(此方のお部屋では)、のどやかに昔物語などしたまふ(のんびりと昔話などをなさいます)。 \*「くらべぐるし」は<比較し難い→両方共に優れている→どちらにも心惹かれる>みたいに読んだ。とても分かり難い語だ。 \*「こなたにては」は注に<六条院の戌亥の町、明石の御方のもと。>とある。やはり冬の町か。それでも、若菜上巻十一章の記事の印象が強い所為か、何となく冬の町は明石尼君の住まいという気がする。若菜上巻十章の若宮(今の東宮)の出産は十二年前の三月の話で、その当時で明石尼君は65,6歳とのこと(若菜上巻十章三段)だったので、この大祖母尼君は存命であれば78歳くらいで、有り得なくは無いが当時なら可也な長寿だったはずで、であればなお

さら冬の町の主のように思えるし、片や、今や東宮の祖母君である明石御方が、いくら表向きはその立場を主張出来ないとは言え、血筋の紛れ無さからして、冬の町には似合わなそうに見える。

「\*人をあはれと心とどめむは(他人に存在価値を見出して、その人を大事に思うことで自分の存在意義を高めようとするのは)、\*いと悪ろかべきことと(無常を悟らない愚かしい考えだと)、いにしへより思ひ得て(昔から分かっている)、すべていかなる方にも(全てどんな相手の女の方に対しても)、この世に執とまるべきことなく(現世への執念を持つ事が無いように)、心づかひをせしに(気を付けて来たのだが)、 \*「人をあはれと心とどめむは」は渋谷訳文に<女をいとしいと思いつめるのは>とあり、多分、そうした意味合いの言い回しをしているのだろう、とは私も思う。が、此処の文は「この世に執とまるべきことなく」という出家決意を前提に其に触る物の排除を図る、という理屈立てで語られているように思えて、それなら敢えて、此処は理詰めで言い換えて文意を見てみたい。 \*「いと悪ろかべきこと」というのは<無常を悟らない愚かさ>のことだろうと読んで置く。が、私自身はこの考え方には全く従えない。尤も、もともと人生の意味の是非を論じる心算など無いので、世の中を雑感した印象での話だが、異論は異論だ。さて、世の中は無常であり、恒常を期待しても保障されない、として、それを悟ろうが悟るまいが、人はそういう世の中で生きる他はないのだから、その認識を生かすのは保険機構の意義を説明するには有効かも知れないが、むしろ保険での担保も限りあるものと知るなら、殊更に、無常を悟って平常心を保つ事だけが救いになる、などと考えて死後に救いを求めなくても、個体は自己消滅を以て清算されてしまうのだから、死を以て救われるのは自分も同様なので、それでも自殺の身勝手さこそは空虚であり、現世利益を至上命題とする拝金主義を卑しく思うのは勝手だとしても、素直に納得出来る真心を以て快活に生きることこそが生命体を全うする事に見えるし、それが故に時として取り乱す事があっても、それは少しも見苦しくないし、何にも執着が無い人生じゃ面白くない、と思う。とはいえ、生霊や死霊は霊魂自体も含めて、それを見る人や考える人の執着に過ぎない、とは当然にも考えている私でも、符と何かの物陰や光や暗闇に何者かの意思を夢想する事も無いでは無いし、それを重く実感したりもするが、だからこそ執着なワケで、限度を超えた不埒を取り締まるのは法治であろうと独裁であろうと組織運営上で必要な規制処置に過ぎない。だからと言って、人は面白がるためだけに生きている、と言うのは余りに短絡だろうが、救われるためだけに生きている、と言うのも一面的で、自分を信じればこそ愛する人を大事にする、という生き方は内実を実感し易いので充実感があり、その愛に命を掛けるという生き方は、別の教条にあるかのように、正しいという言い方は避けるし、殊更に望ましいと言うのも控えるが、個体が淘汰変遷で獲得した知覚装備の標準性能で感知し得る主要な判断基準に拠る物のひとつには違いない、とは即ち、素直な生き方だ、ということだ。故に、外形的な規定を設けて教条に生きること自体に、史実として人々が組織し大きな仕事を成し遂げてきたという経緯は認めるにしても、それらはその時点での富の構築を図る発展的運営に有効な組織管理方法だったものに過ぎず、それが全てだとか、絶対的な価値があるなどは、今を生きる私は信じない。およそ、有機生命体が捕食可能有機物の限りに繁殖して、捕食物質の減少に拠って多くの個体が淘汰される、みたいな原理は、どんなに巧妙に管理しても、本質的には無くなる問題だ。

\*おほかたの世につけて(時の世相によって)、身のいたづらに\*はふれぬべかりしころほひなど(須磨に流離して、この身を無役に彷徨わせて粗末に投げ出してしまいそうだった時などに)、\*とごまかうごまに思ひめぐらししに(過去の色々な女関係を反省する事頻りだったので)、命をもみづから捨てつべく(出家どころか、命自体さえ自ら捨てる心算で)、野山の末に\*はふらかさむに(野山の末の辺鄙な地へ流離しようとした時に)、ことなる障りあるまじくなむ思ひなりしを(特に妨げになるような未練も無いと悟ったように思ったものだが)、 \*「おほかた」は<全般、趨勢>。「おほかたの世」は<(時の)世の趨勢>。 \*「はふる」は「放る」で<放浪する>。「いたづらにはふれぬ」は<粗



末に放り出してしまおう>という一般語用とく無冠で流離することになる>という具体意が掛かった言い方になっているようだ。注には此処の文意についてく須磨明石流離のころをさす。>とある。ということは、源氏殿は須磨流離時代のことを「いにしへ」と言っているらしい。\*「とぎまかうぎまに思ひめぐらしし」は、六姫との浮気とその発覚を反省した、ということなのか、その他の、とくに藤壺入道宮との不義およびその不義の子への責任を罪悪と重く感じたのか、六条御息所に真を尽くさなかった悔いか、車争いや葵の上の早世や若宮を母無し子にしてしまった自責か、その他も含めた過去の女関係全てへの反省か、その中身は特定出来ないが、「この世に執とまるべきことなく」「人をあはれと心とどめむ」ことを反省した、ということではありそうだ。が、実際はその後に明石へ流れて、受領腹に今や中宮にまで上り詰めた女子を儲ける、という御盛ん振りで、ということは政治的な野心も少しも衰えていなかった、ということを実に示す生き様を源氏殿はしているワケで、事ほど左様に源氏殿は現世未練を火の玉のように滾らせていたのであり、政治勢力と裏腹というか両輪関係である女への執着が無い、などというのは、客観的に見て嘘八百も良い所だ。男の目から見る史観では、権力と女に塗れた生への執着心が時代を動かす原動力とは常識に思えるが、如何にもその色合いの濃いこの好漢の生き様を、しかしながら、この作者は、どこまで仏心との関係で踏まえているのだろうか。深い洞察力を以て此処まで語られて来ている、とは思うので、此処の記事は冗談半分の軽口調で書いているのだろうとは思いますが、少なからずまどろっこしい言い回しをしているように感じるので、酩酊の混乱状態で執筆したのではないかと、ちょっと疑う。\*「はふらかす」は「放らかす」でく放り出された状態にする→見放す、見切りをつける>くらいか。「はふらかさむ」の「む」は意向・意思を示す助動詞で、「はふらかさむに」はく放り出してしまおうと決意した時に>。

末の世に(晩年の)、今は限りのほど近き身にてしも(この余命も少ない身だというのに)、\*あるまじきほだし多うかかづらひて(見苦しい出家への妨げになる恋情に多く関わって)、今まで過ぐしてけるが(今まで過ごして来たのが)、\*心弱うも(意志が弱くて)、もどかしきこと(不本意な所だ) \*「あるまじきほだし」はく不当な邪魔立て>みたいな言い方だが、十二年前の女三の宮との結婚と、その事で紫の上を追い詰めた事、遂には此処に死去させた事、はたまた、中途半端な扱いになった女三の宮が衛門督藤君と不義を過ち、その子を設けたこと、などを指しているのだろう。勿論、表立って言えることは限られるが、全体に曖昧表現なので中身は聞き手の判断に任される、という仕組みだ。注にはく『源氏物語事典』は「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ」(古今集雑下、九五五、物部吉名)を指摘。>とある。この参照歌は何度も引かれている「同じ文字なき歌」と詞書された大喜利物だ。やはり、この源氏殿の発言文は冗談半分の趣きなのだろう。\*「心弱うも、もどかしきこと」は注にく『完訳』は「出家の初志を貫きえなかった気弱さとして自らを非難」と注す。>とある。が、「自らを非難」というのは表向きだ。是は今で言うく若気の至りで面目ない>みたいな言い方で、確かに出家を愚図った意志の弱さ、みたいな筋は言って言えなくもないので言っているが、その実は自分の精力、生命力、実力、権勢などが如何に盛んだったかの自負自慢だ。

など(などと殿は)、\*さして一つ筋の悲しさにのみはのたまはねど(紫の上の死を其れと指して唯一の悲しい事とは仰らないが)、思したるさまの\*ことわりに心苦しきを(お悲しみになっている殿のお姿が如何にも痛々しいのを)、いとほしう見たてまつりて(明石御方はいたわしく拝し申し上げて)、\*「さして一つ筋の悲しさにのみ」は注にく紫の上の死去をさす。それと名指ししての意。>とある。\*「ことわりに」はく明石御方の見立てに於いて>。「心苦しき(痛々しくある)」は「思したるさま(お思いになっている殿の姿)」を修辞する。文意としては左様にとって置くが、何でこんな変な言い回しをするのかと思うほど分かり難い書き方だ。女房語りの感性なのか、受領に対する身分意識の分かり難さなのか、何かが馴染めない。

「おほかたの人目に(多くの人の目で見ても)、何ばかり惜しげなき人だに(特に惜しまれない身分の低い者でさえ)、心のうちのほだし(執着心は)、おのづから多うはべるなるを(それなりに多く在るものですが)、ましていかでかは心やすくも思し捨てむ(まして殿のような高位で価値のある世界の人と物の中で生きる御方は、どうして簡単に出家なされましようか)。

\*さやうにあさへたることは(そのような浅慮での出家は)、かへりて軽々しき\*もどかしさなども立ち出でて(却って軽々しい信心の薄さなども現れて)、なかなかなることなどはべるを(中途半端な大味の人生にもなりかねませんが)、\*思したつほど(出家の決心を)、鈍きやうにはべらむや(じっくり固めた方が)、つひに澄み果てさせたまふ方(最終的には澄み切った境地に至りなざる事に於いて)、深うはべらむと(深い意味がある人生だと)、思ひやられはべりてこそ(存じられます所です)。 \*「さやうにあさへたることは」の文意は、注に<『集成』は「(たやすく出家するような) 浅はかなことは」。『完訳』「深い道心に基つかない出家」と注す。>とある。 \*「もどかしさ」は<至らなさ→信心の不足>みたいに取ってみた。 \*「思したつほど鈍きやうにはべらむや」の文意は、注に<すらすらと出家するよりも迷いに迷った末の出家のほう悟りの境地に達しやすくだらう、>という意見。>とある。訳文と原文を見比べながら少しづつ意味を取ったが、結構な難文だ。

\*いにしへの例などを聞きはべるにつけても(昔の例などをお聞き致しましても)、心におどろかれ(急変に驚き)、思ふより違ふふしありて(不本意な目に遭って)、世を厭ふついでになるとか(出家を思い立つ事になったことがあるとか)。それは\*なほ悪るきこととこそ(それはやはり感心できないこととされているようです)。 \*「いにしへのためし」は注に<『花鳥余情』は花山院が弘徽殿女御藤原為光の女の死に際して俄に出家したが、後に俗世に再び執着した事例を引く。>とある。どうやら、明石御方が言う「いにしへ」は一般的に言う<昔の前例>らしい。が、源氏殿が言う「いにしへ」は<須磨流離>だったので、それは明石御方にとっては好機だったのであり、二人の出会いの時だったのだから、今の雲上暮らしから思えば、源氏殿の昔話は、地獄で巡り会った者同士が良くぞ此処まで昇り詰めた物だ、みたいな懐古の感慨が示されていたのだろうし、それに対する応答意も含まれている、とは思う。だから洒落ているんだろう。 \*「なほ悪るきこととこそ」は、殿の言った「人をあはれと心とどめむは、いと悪ろかべきことと、いにしへより思ひ得て」の呼応した「なほ」なのだろう。また、「こそ」の下に省かれた言い方は、御方の立場では前例に対しても殿に対しても<あめれ>などの非断定の曖昧表現になりそうだ。

なほ(更に)、しばし思しのどめさせたまひて(もう少し出家は思い止まりなさって)、宮たちなどもおとなびさせたまひて(孫宮たちなどがご成人なさって)、\*まことに動きなかるべき御ありさまに(本当に確立された御即位などを)、見たてまつりなさせたまはむまでは(見届け申し上げなされるまでは)、\*乱れなくはべらむこそ(後見側が変わりなく平穩でいる事が)、心やすくも(安心できて)、うれしくもはべるべけれ(嬉しくも存じます)」 \*「まことに動きなかるべき御ありさまに」は注に<『集成』は「本当にゆるぎないご身分と、お見極め申し上げなされるまでは。東宮(第一皇子)の即位のことなどをさす」と注す。>とある。殿の出家が即位へ障りかねない懸念が明言された。 \*「乱れなくはべらむ」は敬語遣いが無い。が、是は御方自身のことと言うよりは殿の出家を制止する言い方だろうから<乱れなくおはしますこそ>あたりになりそうな気がする。それがこういう言い方になっているのは、「宮たち」に対する祖父祖母としての謙遜表現か。此処に来て、御方が自分も宮の祖母血筋だと主張しているのか、作者に何らかの意図が有るのか無いのか、分からないだけに、妙に気になる。

など、いとおとなびて聞こえたるけしき(などととても全体を周到に理解してお応え申す態度は)、いと\*めやすし(とても信頼できます)。\*「目安し」は<好感が持てる>でもあるだろうが、殿の立場から見れば此处では<安心できる>に近い語感なのではないか。で、「安心できる」は<頼りになる、信頼できる>。注には<『評釈』は「明石の御方の理知的な聡明な性格が、源氏の出家への歩みを説明する役割を与えているのである。その役割のはたしぶりを作者は、「いとめやすし」と賞めるのだ」と注す。>とある。ただ、作者の説明と読むのは、私には興醒めだ。せめて、殿の目線と読みたい。

#### [第八段 明石の御方に悲しみを語る]

「さまで思ひのどめむ心深さこそ(そこまで気長に考える用心深さでは)、浅きに劣りぬべけれ(却って機を逸して、短慮に劣ってしまうだろう)」

など\*のたまひて(などと殿は冗談を仰って)、昔より\*ものを思ふことなど語り出でたまふ中に(昔から出家を考えるほどの悲しい出来事などをお話し出される中に)、\*「のたまひて」は物の道理や意味をよく心得ている明石御方を「めやすし」と思った上での、この人になら通じると思って殿が言った冗談だ。\*「ものを思ふことなど」は御方の言った「心におどろかれ、思ふより違ふふしありて、世を厭ふついでになる」に呼応した言い方で、殿が自分なりの例示を試みる、ということらしい。

「\*故後の宮の\*崩れたまへりし春なむ(故藤壺宮が逝去なさった春には)、\*花の色を見ても(桜を見ても)、まことに心あらばとおぼえし(本当に花に春を装う気持ちが有るなら、せめてその年だけでも灰色に咲いて欲しいと思ったものです)。\*「故後の宮」は注に<藤壺の宮をさす。>とある。以前はよく故入道宮と呼称していたかと思うが、今や入道宮といえば女三の宮のことを指すから、こう呼ぶのだろう。紛らわしいが、客観的な統一呼称が無いという不便な慣習を、独特な価値観で便利に続けていた時代のようなので、仕方が無い。が、言い換えでは<故藤壺宮>を使いたい。\*「崩る」は「かくる」と読みがあり、それなら「隠る」の漢字表記で良さそうだが、何故「崩」の字を当てているのか分からない。「隠る」でも「隠れたまふ」と敬語遣いすれば<崩御なさる>の意になる。ともあれ、藤壺入道宮の死去は二十年前の源氏殿 32 歳、藤壺宮 37 歳の時のことだったが、ここに「春」とあるので、やはり薄雲卷三章二段の「入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月にはいと重くならせたまひぬれば」とあった、そのままに晩春三月に亡くなったようだ。\*「花の色を見てもまことに心あらば」は注に<『源氏釈』は「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」(古今集哀傷、八三二、上野峯雄)を指摘。>とある。

それは、おほかたの世につけて(それは当時の評判で)、をかしかりし御ありさまを(絶世であった藤壺宮の御姿を)、幼くより見たてまつりしみて(幼い時から拝見申し馴染んでいた)、さるとちめの悲しさも(その亡くなった悲しさも)、人よりことにおぼえしなり(人一倍強く覚えたからなのです)。\*みづから取り分く心ざしにも(私自身が特に気に入った女への愛する心によって)、もののあはれはよらぬわざなり(悲しみが起こるものでは無いようです)。\*「みづから取り分く心ざしにも、もののあはれはよらぬわざなり」は注に<『集成』は「自分が特別深い愛情を持っているから、特に無常の悲しみが深いとも限らぬようです。藤壺の死をこれほどまで悲しむことについての弁解」。『完訳』は「心にしみる哀感というものは、自分がその人にとりわけ深く思いを寄せているからとはかぎらないのです」と注す。>とある。確かに、「幼くより見たてまつりしみて」を悲しみの理由にした言い方に被せた言い訳、のように見える。しかし、大ウソだ。そして理屈も捻じ曲げている。だから文意も分かり難い、のだろう。それにしても、こ

んな変な言い方をする意図は何か。下文には、紫の上の死を悲しむのも、単に愛した女だからと言うことではなく、幼い時から育てて来て、人生全体を見る気がするからだ、みたいな言い方をしているようなので、明石中宮を設けた明石御方に対して、女としてはあなたも特別に愛して来た、ということを示そうとしている、と一応は読んで置く。が、こういう言い方に説得力が有るようには私には思えないのは、私が男だからだろうか。作者が女だとして、女ならこういう言い方で、或る程度は納得できるのかと考えてみても、やはり釈然としない。むしろ、殿には結局は女心は分からない、ということを示す文なのだろうか。とても分かり難い言い方の、とても分かり難い意図の文、ということで何れの意味でも難文だ。

\*年経ぬる人に後れて(長年連れ添った人に先立たれて)、心収めむ方なく忘れがたきも(心の整理が着かず、いつまでも忘れられずに悲しんでいるのは)、ただかかる仲の悲しさのみにはあらず(ただ男女の夫婦仲についての思いからだけでは無いのです)。\*「年経ぬる人」は注に<紫の上。>とある。

\*幼きほどより生ほしたてしありさま(紫の上の幼い時から育て上げてきた成長振り、を思えば)、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて(共に老いて来た晩年に取り残されて)、わが身も人の身も(自分の人生にとっても上の人生にとっても)、思ひ続けらるる悲しさの(思い出され続ける場面の多さに)、堪へがたきになむ(感慨が深いのです)。\*「幼きほどより生ほしたてしありさま」は注に<藤壺の場合の「幼くより見奉りしみて」と同じ。共に過ごしてきた長い歳月の重みがある。>とある。確かに藤壺宮に対しては、公然とは<自分の女>とは言えない立場の殿だが、親しく馴染んできたのは、気に入った相手だったからであることには違はなく、その意味では<「取り分く心ざし」によるものだった>という理屈が成立してしまう。尤も、そんな理屈を殊更に言い立てなくても、明石御方が殿の紫の上への愛情の深さを知らない筈など、端から有りもしないが。

\*すべて(総じて)、もののあはれも(感受性の深さも)、ゆゑあることも(情緒の味わいも)、をかしき筋も(管弦の楽しみも)、広う思ひめぐらす方(ものの考え方も)、方々添ふことの(それぞれ備わっていて)、浅からずなるになむありける(優れた人なのでした)。\*「すべて」は紫の上に対する殿の評価の総論らしい。正妻への賛辞を聞かされる妾妻の立場は、まるで<女はつらいよ>の世界だが、明石御方は身の程を知る女なので、最初から一歩引いて、殿の心の整理に付き合った、ということなんだろう。

など、夜更くるまで、昔今の御物語に(などと夜が更けるまで昔のことから今のことまで続く話題に)、「かくても明かしつべき夜を(このまま夜明かししてしまいそうな夜だが)」と思しながら(とお思いになりながら)、帰りたまふを(殿が自室にお帰りになるのを)、女もものあはれに思ふべし(明石御方も女心にもの悲しく思うようです)。

わが御心にも(殿も我ながら)、「あやしうもなりにける心のほのかな(女の部屋に泊まる気がしないほど色気が失せたとは、ずいぶん変わってしまった心持ち具合だ)」と、思し知らる(と覇気の無さを思い知りなさいます)。さてもまた(そのまま部屋に戻って再び)、例の御行ひに(定刻通りに念仏を唱えなさって)、夜中になりてぞ(夜中になってから)、昼の御座に(居間の方に)、いとかりそめに寄り臥したまふ(ごく簡素に仮眠なさいました)。

つとめて(翌朝)、御文たてまつりたまふに(殿は明石御方に御手紙を差し上げなされるには、次のように贈歌なさいます。)、

「なくなくも帰りにしかな、仮の世はいづこもつひの常世ならぬに」(和歌 41-06)

「雁が鳴く鳴く帰るのは、床に寝つけぬ頼りなさ」(意識 41-06)

\*注に<源氏から明石への贈歌。「鳴く」「泣く」、「雁」「仮」の掛詞。「常」に「床」を響かせる。「雁」と「常世」は縁語。『河海抄』は「おきもみぬ我が常世こそ悲しけれ春帰りにし雁も鳴くなり」(後拾遺集秋上、二七四、赤染衛門)。『大系』は「白露の消えにし人の秋待つと常世の雁も鳴きて飛びけり」(斎宮集)を指摘。『集成』は「雁は、北の常世の国(不老不死の仙境)から渡ってくると考えられていた。三月、帰雁の季節に寄せて詠む。『完訳』は「北(常世)に帰る「雁」に源氏自身を見立て、「常世」に「床」をひびかせ、永遠にと願った紫の上との共寝も終わった、と嘆く歌」と注す。>とある。詰まりは、共寝もせずに帰ってしまった言い訳を、「雁」と「常世」の縁の所為だと歌筋上で上手く言い繕って、その芸に免じて愛嬌だと笑って済ませてくれ、と洒落込んだ、みたいな感じで、歌はもともと遊ぶ心を楽しむもので、その意味では本格的な歌ではあるのかも知れないが、楽しみが情緒ではなく大喜利になっているところが、尚更悲しいともバカバカしいとも言えそう。それにしても、「床(とこ、共寝)」や「世(よ、京都)」を離れる時の歌詠みに、「とこよ」の音から「常世(とこよ、遠い国・異郷・仙境)」に被せて、異国からの渡り鳥である「雁(かり)」を古来から「常世の鳥」という言い方をして来たことに掛けて、「かり」の音には「仮」の意味を被せて「常」に対比させ、雁が「鳴く」のと別れを悲しんで詠者が「泣く」という歌筋を掛ける、という混み入った仕掛けのこうした詠み方がスラスラできるのには感心させられるが、当時の貴族または歌壇などでは、この掛け方が<床離れ>の歌読みの一種の定番ないし定型化になっていた、ということではあるらしい。それでも、最初にこの仕掛けを思い付いた人は、如何にも座布団を差し上げたい。尤も、必要は発明の母とも言うから、よほどの恐妻家か鬼嫁だった、という事情だったのかも知れない。いや、そういう事情だからこそ、多くの人が共感して、この手法を喜んで真似た、とも考えられる。また、「常世」をウェブ検索すると、須磨巻三章一段の須磨の秋に寂しく望郷して殿と従者で唱和する場面で、惟光が「かきつらね昔のことぞ思ほゆる、雁はその世の友ならねども」(和歌 12-32)と詠み、空蟬の義理の子に当たる前右近将監が「常世出でて旅の空なる雁がねも、列に遅れぬほどぞ慰む」(和歌 12-34)と詠んでいた句がヒットする。

昨夜の御ありさまは恨めしげなりしかど(明石御方は昨夜の殿の御帰りは恨めしく思えたが)、いとかく(これほどに)、あらぬさまに思しほれたる御けしきの心苦しさに(以前とは打って変わって力を落としなさった殿の御姿がいたわしく)、身の上はさしおかれて(自分の切ない事情は後回しにして)、涙ぐまれたまふ(涙ぐまれなさいます)。

「雁がぬし苗代水の絶えしより、映りし花の影をだに見ず」(和歌 41-07)

「雁が居た田んぼの水が絶えたので、映した花の影も見えない」(意識 41-07)

\*注に<明石御方の返歌。「雁」の語句を受けて詠み返す。『河海抄』は「何方も露路と聞かば尋ねまし列離れけむ雁の行方を」(紫式部集)。『花鳥余情』は「秋の夜に雁かも鳴きて渡るなり我が思ふ人の言づてやせし」(後撰集秋下、三五七、紀貫之)を指摘。「苗代水」は紫の上を、「花」源氏を喩える。紫の上の死後、源氏の訪れがないことをいう。>とある。贈歌の洒落心はそのまま汲んで、さらに見事な情景美を詠み込む、という出来の良さ。おかげであまりの絵画印象に言い換えようが無く、深みという点では絶品とは言えないだろうが、贈答共に優れた

佳作に見える。「苗代水」は「なはしろみづ」と読みがある。種苗田の水張りとするれば、当時から水稻の植え替えはあったらしい。灌漑事業が国家管理の基礎となっている事実は今でも根幹では無いのか。この国を守る、と言う時の精神的支柱は工場地帯の鉄筋構造物なのか。情報網を完備した官庁街なのか。まさか、日本は産油国では無いから砂漠に燃え上がる天然ガスの炎でもあるまいが、かといって神社仏閣などの祭祀場でもないだろう。国土を失って流浪するのは、グレート・ジャーニーを運命付けられた人間の宿命かも知れないが、個体にとってその生きる一定期間の拠り所が無くては世代を繋げ無い。切ないとも果敢無いとも言えそうだが、逆に各個体のその場しのぎの連続で人類は生き残って来ているだけで、その類が絶える事は一つの結果に過ぎないと思えば、各個体は無制限に自由になれそうな気もしてくる。切ないから楽しい、みたいな。

古りがたくよしある書きざまにも(殿は明石御方の御返歌の相変わらずの気の利いた詠みっぷりを御覧になるにつけても)、\*なまめざましきものに思したりしを(紫の上が明石御方を何とも目障りなものにお思いだったが)、末の世には(姫の入内後の晩年には)、かたみに心ばせを見知るどちにて(互いに気心を知り合う仲となり)、うしろやすき方にはうち頼むべく(安心できる人と信頼して)、思ひ交はしたまひながら(お手紙を交わしなさりながら)、またさりとて(またそうかと言って)、ひたぶるにはたうちとけず(無遠慮なまでには打ち解けずに)、ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを(分を弁えて応対なさっていらっしゃった御方の心構えの奥ゆかしさまでは)、「\*人はさしも見知らざりきかし(他人には思いも寄らない深慮だ)」など思し出づ(などを思い出さいます)。\*「なまめざましきものに思したりし」は注に<主語は紫の上。>とある。非常に分かり難い。構文上での主語が源氏殿であることを明示しないと、現代語文の書き方としては誰が何を如何思ったかの叙述方法に無理が生じるので、上の「古りがたくよしある書きざまにも」に<殿がその明石御方の返歌を読んで>という外形設定を補語して置く。\*「人」は<紫の上>のようにも読めそうだが、「かたみに心ばせを見知るどちにて」とあるのだから、紫の上は御方の深慮を理解していて、実際にそういう記述も藤裏葉巻や若菜上巻などにあったかと思うが、此处で言う「人」は女房などの<傍目>と読んで置く。

\*せめてさうざうしき時は(非常に寂しい時には)、かやうにただおほかたに(このようにただ雑談の話し相手として)、うちほのめきたまふ折々もあり(殿は御方の部屋に符と少しお立ち寄りなさる時も有りました)。昔の御ありさまには(が、昔のような色めいた御様子は)、名残なくなりたるべし(名残り無く成っていたのでした)。\*「せめて」は現代語の<無理にでも、少なくとも、不十分でも>の語用ではなく<非常に>の意らしい。